

日本語と中国語とは、言葉の世界の両極端だということも言っておきたいと思います。

よく日本語と中国語は同じ漢字を使っているから、言葉も近い関係にあるだろうと思っていますが、世界の言語の中で、日本語と中国語とはまったく性質を異にする言葉なのです。

日本語の足りないところを中国語によって完全に補うことができたことが、日本語を素晴らしいものにした最大の要因です。

中国語と日本語が似たような言葉であつたら、日本語に対してあまり役には立たなかつたでしょう。あまりにも性格が違っていたために、日本語の欠点が中国語によって完全に捕われたのです。

どういうところが両極端かといえますと、まず言葉の基本になる音韻の単位が、世界でいちばん少ないのが日本語であつて、逆にいちばん多いのが中国語です。日本語には同音異義語が相当ありますが、中国語ではそれをすべて異った音で言い分けているのです。世界中に民族が数え切れないほど、それらの民族のもっている言葉の音韻というのは、中国語よりは少なく、日本語よりは多いのです。

ですから、日本語と中国語の間に世界中の言葉がすべて入ってしま

うのです。私の知る限りでは、日本語ほど音韻の少ないものはありません。

日本語は、アルファベットならわずか19個の文字ですべて表すことができます。全部使う必要はありません。ローマ字では「ラリルレロ」にあたるものには、「R」「L」のついたものがありますが、日本語を話す場合にはどちらかを使えば一方はいらなくなってしまいます。「C」は「K」が「S」のどちらかでいいし、「X」はもちろん必要ありません。

こういうふうにしてしまうと、日本語をローマ字で書くと、19個の文字だけで完全に表記でき、発音はそれ以外にないのです。こんなに少ない民族はありません。これが日本語の大きな欠点です。欠点であるけれども、一方では長所と見ることもできます。